WINTER/2024
VOL.104
発行／(公財)東京都人権啓発センター

誰もが幸せを実感できる社会へ

TOKYO人権

生い立ちで制約を受けなくていい

気づき、そして振り返る きっかけに

公益財団法人東京都人権啓発センターでは、皆さんに「人権の大切さ」に気づき、振り返ってもらうことを目的として、毎年、人権啓発ポスターを発行しています。

ご希望の方にポスターをお分けします。
詳しくは下記までお問い合わせください。

公益財団法人東京都人権啓発センター
企画広報課　ポスター担当
電　　話：03-6722-0083
Eメール：homupe@tokyo-jinken.or.jp

※ポスターは3種類あります。送料をご負担ください。在庫がなくなり次第終了とさせていただきます。
・人権週間ロゴ入り　B1縦／B3横
・人権週間ロゴ無し　B2縦

2024年の人権啓発ポスター

東京都が掲げる17の人権課題

●女性 ●子供 ●高齢者 ●障害者 ●同和問題（部落差別） ●アイヌの人々 ●外国人 ●HIV感染者・ハンセン病患者・新型コロナウイルス感染症等 ●犯罪被害者やその家族 ●インターネットによる人権侵害 ●北朝鮮による拉致問題 ●災害に伴う人権問題 ●ハラスメント ●性自認 ●性的指向 ●路上生活者 ●様々な人権課題　（順不同）

/ 公財・東京都人権啓発センター

主催事業等に関する動画をアーカイブし、YouTubeの公式チャンネルで公開しています。
是非ご覧ください。

動画の一例
令和6年度第1回人権啓発指導者養成セミナー「いじめ問題に関するトークセッション」／令和6年度第2回人権啓発指導者養成セミナー「中小企業向け『ビジネスと人権』実践編」

公益財団法人
東京都人権啓発センター
TOKYO METROPOLITAN HUMAN RIGHTS PROMOTION CENTER

〒105-0014 東京都港区芝2-5-6
芝256スクエアビル2階
TEL 03-6722-0082（総務課）
FAX 03-6722-0084
https://www.tokyo-jinken.or.jp/

東京都人権プラザ
TOKYO METROPOLITAN HUMAN RIGHTS PLAZA

（公財）東京都人権啓発センターは東京都人権プラザの指定管理者です。

誰もが幸せを実感できる社会へ

TOKYO人権

WINTER/2024
VOL.104

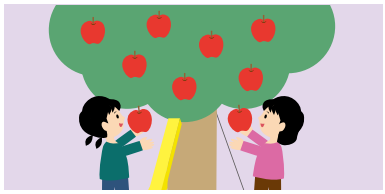
目次　CONTENTS

3 INTERVIEW
社会から見えない存在にされる人々の声を表現したい
ライター　ヒオカ さん

7 子ども向け企画
きみは、知ってる？
アメリカでゲイを公表して、公職についたハーヴェイ・ミルク

8 **人権キーワード解説**
「本当の平等」って何？
人権カルチャーステーション
［評者］横浜国立大学教授 須川 亜紀子（すがわ あきこ） さん

9 JINKEN note
「センサリーマップ」で行きたい場所へ出かけよう
ー感覚過敏の人たちが過ごしやすい場所を広げる
外国につながる子どもたちの学習機会の支援
ー子どもたちを支える鍵としての「多様性」



東京国立博物館

毎週土曜日放送中！

（公財）東京都人権啓発センターでは、身近な人権をテーマとして、リスナーに分かりやすく取り上げる人権啓発ラジオ番組を提供しています。

人権 TODAY

最近の放送テーマ 身近に潜む依存症 オーバードーズ／社会とのつながりが途切れないように…川崎市にある若年性認知症の人の“第三の居場所”

番　組　名｜人権TODAY「まとめて！土曜日」内のコーナー
放　送　局｜TBSラジオ　FM90.5MHz／AM954kHz
放 送 日 時｜毎週土曜日　朝8時22分頃から5分間
キャスター｜藤森祥平さん、北村まあささん ほか

Interview

社会から見えない存在にされる人々の声を表現したい

ヒオカさん
ライター

習い事も、部活にも参加できない実感した不平等

子どものころ、経済的に困窮していたことで、周囲の子どもたちとは違う教育環境で育っていたと思います。例えば音楽や体育など、学校で基礎的なことを学んで興味を持ち、さらにその先を学びたいと思っても、ピアノ教室や水泳教室には、私は通うことはできません。一方で周りの子どもたちは、おめかしをしてピアノの発表会に出演していたり、放課後に様々なクラブ活動をしていました。

教育機会は平等だといわれますが、自分の境遇は周りの子たちとはまるで違うのだということに否応なく気づかされました。それが本当に悔しく、子どもながらに胸がキリキリしました。勉強は好きでしたが、もちろん学習塾にも行けず、通信教育も受けさせてもらえません。やりたいと思ったことに挑戦できない。それが何より悔しかったのを憶えています。

中学高校では部活動への入部が必須でした。高校ではお金のかからないE・S・S・[※1]に入っていました。運動部ではユニフォームが必要だったり、移動費や合宿代がかかったりします。文化部でも道具を揃えなければならなかったり、なにかとお金が必要になるので活動するのが難しいのです。

そんな状況で、何かに興味を持っても、それ以上挑戦する機会を得ることはでき

※1 英語を使った活動に取り組む部活動。

絶望や苦悩の経験も、言葉にすることで人を救える力になる

ひおか

ライター。1995年生まれ。noteで公開した「私が“普通”と違った50のこと――貧困とは、選択肢が持てないということ」が話題を呼び、ライターの道へ。“無いものにされる痛みに想像力を”をモットーに、弱者の声を可視化するための取材・執筆活動を行う。「婦人公論jp」「ミモレ」「ダイヤモンドオンライン」「ビジネスインサイダー」「現代ビジネス」への寄稿など、各種WEB媒体で活躍中。著書に『死にそうだけど生きてます』『死ねない理由』がある。

『死にそうだけど生きてます』
（CCCメディアハウス）

『死ねない理由』
（中央公論新社）

ませんでした。だから、自分は本当は何が好きなのか、何がやりたいのか、それを見つけることができませんでした。

家庭も落ち着いて勉強などできる環境ではありませんでした。家の中は散らかっていて、エアコンもなく暑さでぐったりしていました。そんな状況で、家にいると、何もやる気が起きませんでした。

弁論大会で、私の言葉がエネルギーとして聴衆に届いた

中学生のとき、いじめのターゲットにされました。そのころから、私の唯一の居場所は市立図書館でした。遠距離の中学校に通っていたため、放課後、母が迎えにくるまでの時間を、市立図書館で勉強したり本を読んだりして過ごしました。そこで出合ったいくつもの本が、今息苦しさを感じているこの環境ではない、もっと広い世界があるのだと教えてくれたように思います。

中学3年のとき、私の作文が校内で選ばれ、学校の先生に背中を押され弁論大会に出場しました。舞台に上がり聴衆を見据えたとき、体の奥底から力がたぎるのを感じました。そこでそれまで抑え続けてきた感情を爆発させました。自分の発した言葉が、聴衆にエネルギーとして届くのをありありと感じました。言葉で表現することの持つ力や喜びを、初めて体験した出来事でした。

担任の先生の勧めで志望校を決め、必死で勉強して、高校は進学校に進みました。それからも、市立図書館で勉強と読書を続け、難関大学への進学を志すようになりました。広い世界に出て行って、見たことのない景色を観たいという思いと、今の苦しい境遇から抜け出したいという願いがその動機でした。

もちろん塾に通うことはできず、家には勉強ができる環境はありません。図書館にある受験の情報誌や体験記を夢中で読み込んで、勉強法を模索しました。お年玉ももらっていない状況で、欲しい参考書も新品のものは買えず、インターネットで探して1円で売りに出されていたものを入手しました。勉強している時間だけが現実を忘れられたので、図書館で猛勉強に明け暮れました。難関大学ではありませんが、大学に現役で合格することができました。

豊かな暮らしと困窮する人その間に見えたギャップ

子どものころ育った環境では、周りの

人は皆、高卒で働いていて、大学に進学する人は一人もいませんでした。大学に進学したとき、国公立大学だから苦学生が多いだろうと思っていたのですが、実際はそうではありませんでした。周りの学生は皆ある程度裕福で、両親共に大卒です。本人もあらゆる教育を受けて育って、貧しい家庭環境など、存在すら知らないような人ばかりでした。

入学したときにパソコンを持っていなかったのも、電子辞書ではなく紙の辞書を使っていたのも私だけで、哀れむというより珍しがられました。何かにつけて社会の中での階層[※2]が違うと、常識や習慣、文化も全く違うのだということをまざまざと思い知らされ、本当に驚きました。

大学を卒業してライターとして出版業界と関わるようになってからも、そのギャップへの驚きは続きます。新聞社や出版社の社員は皆エリートで、子どもに習い事や私立受験、留学をさせるのは当たり前という世界です。

彼らには、塾や習い事をするという選択肢すらなく、衣食住にも困るような人々のことは、知識として知っていたとしても意識の中にはないように感じました。

派遣社員として働いていたとき、コロナ禍の影響で雇い止めにあったことがあります。翌日から来なくていいと突然契約を切られても、その後の保障は何もありません。急に収入の目途が立たなくなりました。社会保障の制度からは、短期の派遣で働く人たちの存在は想定されていないように感じました。

格差が広がっているといわれますが、社会に生きる人々が属している階層は、地層のように重なっているように見えます。同じ時代を生きていても、それぞれの階層は他の階層と交わらないことも多いのです。そして経済的に恵まれない階層は、その存在が社会から「不可視化」されているのではないかとさえ思えます。

ライターとして、他の階層の人たちと仕事をするようになってから、ここまで世界が違うのかと、まるで外国に来たような感覚を味わうようになりました。

クリスマスプレゼントやお中元・お歳暮を贈り合ったり、ホームパーティーを開いたりする豊かさのある文化。その文化圏の中で、親や周りの人から、テーブルマナー、金融リテラシー、医療制度、法律などの知識を、自然に学んできた人たちが、そこにいました。経済面に恵まれ、さらにさまざまな面からサポートしてもらえる人的資源にも恵まれた環境にいるのです。しかし、生まれ持ったアドバンテージを自覚することはとても難しいことです。リテラシーや自らの立場を、自らの努力で獲得したと思い込んでしまうこともあるのではないでしょうか。だから、貧困に陥った人々を「努力不足」「自己責任」とあたかも切り捨てるような発言をする人がいるのだと思います。

私は、環境に恵まれず透明な存在にされてしまっている、社会の端に捨て置かれたような人々の声を表現することで、その存在やそこから見える景色を可視化したいと思っています。

好きなものを持ち自分を生き直していく

ライターになり東京で暮らし始めると、貴重な体験をするようになりました。地元では貧困家庭で育ったことで、侮蔑的な目で見られたり、いじめを受けたりと差別されることもありました。ところが、東京では、そのバックグラウンドが、むしろ強みだと捉えられることがありました。バックグラウンドを話すと、「なにそれ、めっちゃロックだね」と反応されたことがあります。

あるお笑いタレントさんは、「今日取材に来てくれたライターさんは、すごくパンチが効いた育ちの人で…」とSNSでつぶやいて、悲惨とか、壮絶とかではなく、「パンチがある」と表現されたことがすごく新鮮だったことを覚えています。

そうしたことが何度かあったおかげで、自分の育ちを隠したり後ろめたく思ったりする必要はないのだと思えるようになりました。

過去を肯定してくれる人たちと出会ったことで、経済的に困窮していた過去があっても、自分に制約をかけなくてもいいのだと思えるようになりました。自分が望むことを追い求めていいのだと。例えば、一見、派手に見える服装やファッションを身につけることで、バッシングを受けることもあります。それでも、これまでは望んでも叶わなかった、好きなものを持つことや、身に着けることは、「自分の人生を生き直していく」ために必要なことだと考えています。生きていくことだけで精いっぱいで、得ることのできなかった文化や豊かさを取り戻していきたいし、今までできなかった自分を表現することを思い切りやってみたいのです。

経済的に困窮している人が夢や理想を語ると、「もっと現実を見るべきだ」と批判されることがあります。しかし、貧しいことを理由に夢をあきらめることを強いられたり、職業や好きなものから遠ざけられたりすることは、本来誰もが持つ人権が制限された状態を受け入れることに他ならないと思います。

※2 社会経済的地位によって序列化された社会層。財産・職業・学歴・年齢などが尺度とされる（岩波書店『広辞苑第7版』より）。

同じように苦しんでいる人を救う言葉を紡ぎ届けたい

伝えることで「自分だけじゃない」を届けたい

これまでの私は、いつどうなるかわからない不安な状況の中で、ただ生きていくことに必死でした。学生時代から数年前まで、家賃を節約するために格安のシェアハウスを転々としていました。シェアハウスには、エアコンがなく過酷な暑さで、何度も熱中症になりました。ほかにも、雨漏りで床に水たまりができたり、カビやハウスダストでアレルギーを発症することになったりと、劣悪な環境のところばかりでした。

そんな住環境の中で、明日を生き延びるためのお金の心配をしなければならない。生きていくための不安が多すぎて、漠然と「生きていけない」と思っていました。常に不安にさらされて、生存本能が搾りとられて生きようとする気力がなくなっていきました。

今は一人暮らしができるようになり、お笑いタレントやアーティストなどの大好きな「推し」ができました。好きな音楽やファッションなど、文化的なものを楽しむ余裕ができたことで、初めて「生きてもいいのかな」と思えるようになってきました。

好きなお笑いタレントが語る貧しかった子どものころの経験が、私の子どものころの体験に重なりました。その人が体験した絶望やどうしようもない苦しさが、言葉になって紡がれ、その一つひとつに共感し、救われる気持ちになりました。

この苦悩は自分だけじゃない、そう思うことで救われることがあります。私も自分の苦しかった過去を言葉にすることで、誰かの心が少しでも楽になったらいいなと思っています。読んでくれた人が「貧しくても自由に生きていいんだ」「自分だけじゃない」と思ってくれれば、これまでの苦労も報われ、私も救われるのです。

経済的に苦しかったという私のバックグラウンドは、私を構成する数多くの要素のたった一つでしかありません。「貧困家庭出身」という立場からメッセージを届けてきたことは確かですが、いつまでも「そういう生い立ちのかわいそうな人」にとどまる必要はないと思っています。

そこから抜け出して、次のステップに進んでいきたいと考えています。これからは、音声など、文章以外の表現も模索していきたいと思っています。

インタビュー 吉田 加奈子（東京都人権啓発センター 専門員）／編集 杉浦 由佳／撮影（表紙・2～6ページ）百代

ヒオカさんのおすすめDVD

ちゃんみな
『THE PRINCESS PROJECT』
提供：ワーナーミュージック・ジャパン

きみは、知ってる？

アメリカでゲイを公表して、公職についた ハーヴェイ・ミルク

昔のアメリカでは、同性愛者の人たちは差別されていて、警察に見つかるだけで逮捕されることもありました。今回はそんな時代に、レインボー・フラッグをシンボルに誰もが自分の好きなように生き、好きな人を愛することができる、平等な権利を主張してパレードを行ったハーヴェイ・ミルクについて紹介します。

私たちは嫌がらせを受けたくないし、仕事でも平等な権利がほしいのです。※1

ハーヴェイ・ミルク

ハーヴェイ・ミルクは大学卒業後、海軍で潜水士として働いていましたが、ゲイであることが知られて、職を失いました。社会を変えるには、政治に関わることが大切だと考えたミルクは、サンフランシスコの市政執行委員選挙※2に出馬し続けて、1977年に当選しました。1978年には、同性愛者の教師を解雇する法律を廃止することに成功しました。

また、同じ年に、レインボー・フラッグを掲げて不平等な扱いや法律に抗議するパレードを行いました。しかし、その5か月後、ミルクは銃で撃たれて亡くなってしまいました。ミルクの活動は、同性愛者が権利を主張するための、大きな力になり、今もレインボー・フラッグは、誰もが自由に生きられる平等な世界のために、掲げられています。

もっと知りたいときは

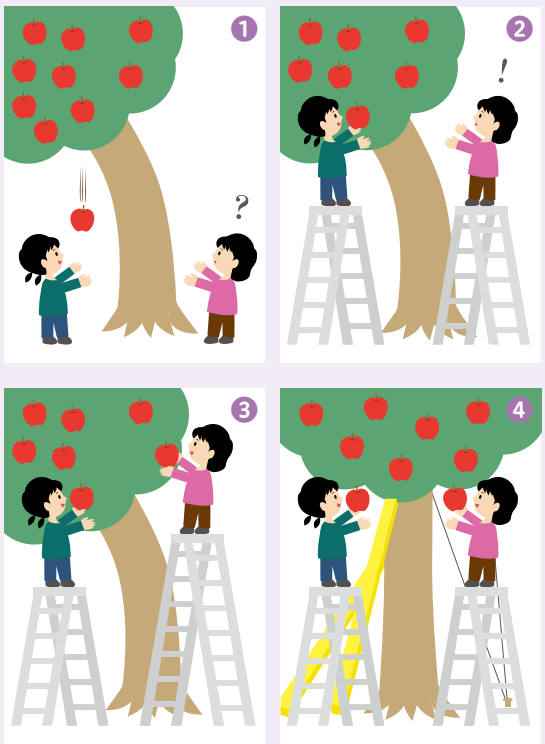
『レインボー・フラッグ誕生物語
セクシャルマイノリティの政治家ハーヴェイ・ミルク』
（ロブ・サンダース 作／スティーブン・サレルノ 絵／日高 庸晴 訳／汐文社／2018年）

※1 伏見 憲明監修・安齋 奈津子訳『MILK 写真で見るハーヴィー・ミルクの生涯』AC Books、2009年、51ページ。
※2 市政執行委員：アメリカの一部の州にある機関で、法律をつくるのではなく、行政を監視、評議する人のこと。

人権キーワード 解説

このコーナーでは、聞いたことがあるけれど、わかりにくい人権に関連するキーワードを解説します。

本当の平等って何？



❶ 1人はリンゴを受け取れますが、もう1人は受け取れません。

❷ 2人に同じ大きさのふみ台を渡してみましょう。2人ともリンゴを受け取れますか？

❸ リンゴに手が届かない人に、より大きなふみ台を渡すと2人ともリンゴを受け取れますね。しかし、これで充分でしょうか？

❹ 傾いた木を直し、2人に同じ大きさのふみ台を渡すことの方が、よりよい結果になると思いませんか？

不平等をなくすためには、それぞれの人にふさわしい「ふみ台」が必要ですが、だれもが公平な機会をもてるような環境を整備することも重要です。

※イラストはJohn Maeda's 2019 Design In Tech Reportにて紹介されたTony Ruth（@lunchbreath）の作品“Addressing Imbalance”を基に再作成しました。
また、栗本 敦子・伏見 裕子『これからの社会を生きていくための人権リテラシー（第2版）』（北樹出版、2024年）も参考にしました。

人権カルチャーステーション

「人権の視点」をもつことで世界の見え方が変わる

Series-6
中高生向け
アニメレビュー

「プリキュア」シリーズ

#ジェンダー　#LGBTQ　#多様性　#包摂

©ABC-A・東映アニメーション
「HUGっと！プリキュア」（2018年～2019年）
「デリシャスパーティ♡プリキュア」（2022年～2023年）
「ひろがるスカイ！プリキュア」（2023年～2024年）

だれもが自分らしく生きることの大切さとそれを尊重する心

20年続いている人気の「プリキュア」シリーズでは、多様なジェンダーへの挑戦がみられる。「HUGっと！プリキュア」（2018～2019）では、カワイイものやドレスに興味のある美意識の高い少年、フィギュアスケーターの若宮アンリは、やりたいことを貫く意思を持った瞬間、プリキュアに変身する。ゲストとはいえ、シリーズ史上初めて男の子のプリキュアが誕生した。「デリシャスパーティ♡プリキュア」（2022～2023）では、プリキュアたちを助けるクッキングダムの捜索隊長ローズマリーが登場。美意識が高く、化粧もし、女性ことばで話す若い男性だが、すぐに皆に受け入れられる。「ひろがるスカイ！プリキュア」（2023～2024）では、人間に変身できる鳥族の夕凪ツバサが、ついにレギュラーの男の子プリキュアとなる。プリキュアシリーズには、多様なジェンダーのキャラクターの生き方を通じて、誰もが自分らしく生きること、そしてそれを尊重する心の大切さが描かれている。

評者　須川 亜紀子（すがわ・あきこ）横浜国立大学教授
アニメ・漫画・2.5次元舞台などのオーディエンス／ファン研究。『2.5次元文化論：舞台・キャラクター・ファンダム』（青弓社、2021年）など。

JINKEN note

人権に関するコラムや体験、
おすすめの映画や書籍などを紹介するコーナー

Theme 01

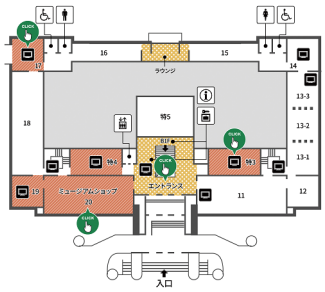
「センサリーマップ」で行きたい場所へ出かけよう
―感覚過敏の人たちが過ごしやすい場所を広げる

一人一人の感覚の違いを意識した多様性を尊重する取り組み

日常生活において感じる、光や音などの感覚は人によって違いますが、中には特定の感覚を強く感じる人もいます。多くの人が感じるよりも、感覚を強く感じる特性を「感覚過敏」と言います。公共施設の明るさや温度、街中のにぎやかさといったものは、平均的な感覚に合わせて、設定されたり、配慮されたりしています。このため、感覚過敏の人は、多くの人が心地良いと感じる光をまぶしく感じたり、さほど気にならないざわめきをうるさく感じたりすることがあります。東京国立博物館では、感覚過敏の人が博物館で楽しく過ごせるようにという思いから、「センサリーマップ」を作成しました。博物館教育課長の鈴木みどりさんに東京国立博物館でのセンサリーマップの取り組みについて聞きました。

センサリーマップの作成経緯

センサリーマップとは、光や音などの感覚情報を表したマップで、東京国立博物館では「座れる場所」「音情報」「光情報」の三つのセンサリーマップが、インターネット上で公開されています。作成のきっかけは、職員が訪れたイギリスで、センサリーマップやクワイエットアワー[※1]という取り組みが小さな町でも行われているのを知ったことでした。そして、創立150年記念事業の一環としてセンサリーマップ作成を始めました。大英博物館やシンガポール国立博物館のもの等を参考に、東京都自閉症協会や建築環境に詳しい専門家の意見を反映させながら、作成しました。



ホームページ上で閲覧できる「センサリーマップ」。
指マークをクリックすると情報が表示される。

一人一人の感覚の違いを反映させる

感覚過敏は特定の人にあるだけでなく、誰もがなる可能性があります。普段は感覚で生活に困らない人でも、疲れなどがきっかけとなり、感覚が過敏になることがあります。鈴木さんはセンサリーマップを作成する中で、感覚は一人一人違うだけでなく、一人の中でも一定ではないことを実感し驚いたと言います。「感覚過敏の症状がある人の誰もが、光も音も匂いも強く感じるのではなく、光だけ強く感じる人もいれば、いくつかの感覚を強く感じる人もいて、いろいろな感覚があります」。

東京国立博物館では、一人一人の感覚の違いを知ってもらうための、定期的に開催するキッズデー[※2]で、センサリーマップを作る親子向けワークショップを行いました。「参加者が、人によってそれぞれ感覚が違うことを楽しく体験できる機会となったのでは」と鈴木さんは言います。

センサリーマップから始める多様性への取り組み

東京国立博物館がセンサリーマップを作成してから、国内でも少しずつセンサリーマップの作成を検討している博物館等が増えています。誰もが安心して博物館等を楽しめるためには、センサリーマップ以外にも、カームダウンスペース[※3]やクワイエットアワーなどの設定や、イヤーマフ[※4]やサングラスを着用しての鑑賞も、それぞれの状況に応じた感覚過敏への対応として考えられます。

センサリーマップの取り組みは、感覚の刺激に不安のある人を含め、一人一人の感覚の違いを意識した多様性を尊重する取り組みであると言えそうです。

インタビュー・執筆 藤本 尊正（東京都人権啓発センター 専門員）

※1 スーパーマーケットなどで放送を一定時間停止して、音の刺激をなくすための取り組み。
※2 子どもに博物館の楽しさを知ってもらうため、イベントを開催したり、食事や休憩ができるキッズスペースを設けたりする一日。
※3 感情の高ぶりやストレスが溜まった場合に、落ち着きを取り戻すための空間。
※4 聴覚過敏で困る人が音の刺激から耳を守るための防音保護具。

Theme 02

外国につながる子どもたちの学習機会の支援

―子どもたちを支える鍵としての「多様性」

多様な背景を持つ子どもたちが安心して成長できる環境づくり

日本国外にルーツを持つ「外国につながる」子どもたちの学習機会の支援が課題となっています。日本では、日本国籍を持たない保護者に対しては、就学義務はありませんが、公立の義務教育諸学校へ就学を希望する場合、国としては、国際人権規約等も踏まえ無償で受け入れています。[※1] しかし、不就学または不就学の可能性があると考えられる外国籍の子どもの数は、2023年5月の時点で、8601人と報告されています。[※2] この数字の背景と課題について、日本語支援を行うNPOでお話を聞きました。

日本語習得における課題

NPO法人青少年自立援助センターが運営する「YSCグローバル・スクール」[※3]の担当者は「外国につながる子どもたちにとって、学習の大きな障壁となるのは、日本語能力の不足です。このため、学校での学習や社会への適応が難しくなっているのでは」と分析しています。

文部科学省の調査[※4]によれば、2023年時点で、日本語指導が必要な外国籍の児童生徒数は5万7718人にのぼります。また、両親のどちらかが日本人で日本国籍を持っていても、一定期間海外で暮らすなどで日本語を習得していない子どもたちもいます。

日本語指導を要する子どもたちの使用言語は多様化しており、住んでいる地域も集住化が確認できる一方、これまで就学年齢の子どもがいなかった地域へも散らばって住む傾向がみられており、地域の実情に応じた対応が進められています。

NPOでの日本語支援

これらの問題解決を支援するために、同スクールでは、外国につながる子どもたちを対象にした日本語教育・学習支援を平日の日中に毎日提供しています。同スクールは、2010年度から小中学生や既卒の高校進学希望者のための日本語学習支援の場として、フィリピン、ペルー、ウクライナなど、数十カ国にルーツを持つ約400人がスクールを利用しており、うち6割が通所、4割がオンラインで支援を受けています。

また、2016年度からは地方自治体からの委託により、オンラインを活用して全国各地に住む子どもたちにも専門的な支援を届けています。

多面的な支援と必要なケア

「YSCグローバル・スクール」で統括コーディネーターを務めるピッチフォード理絵さんは、子どもたちに十分な支援が行き届かない状況について次のように話します。

「公立学校で日本語支援は行われていますが、日本語教育を担当する教師が年少者日本語教育の専門家ではないことが多く、また、自治体によって日本語指導の時間数や内容に差があります。学校外の民間で行う支援の場合は、多くは無償のボランティアに頼っており、専門的な知識や技術を持つ指導者が不足しています」。

また、家庭環境や生活環境の厳しさが、学習支援の障壁となることもあるとピッチフォードさんは説明します。「例えば、貧困や不安定な生活状況に直面している場合も多く、学業に集中できないことがあります。子どもたちにとっては『安心できる居場所』や『信頼できる大人』の存在が成長を支える大きな要素となります。心のケアや生活面での支援が、学業の向上にもつながるのです」。

多様性の尊重と社会の責任

外国につながる子どもたちの支援においては、「周囲の理解と支援が、子どもたちの力を引き出すために不可欠」と話すピッチフォードさん。「単に学習の機会を提供するだけでなく、子どもたちが安心して成長できる社会環境を整えることが求められています」と強調します。

社会全体で多様性を尊重し、包摂的な環境をつくり出すことにより、子どもたちが自分の可能性を最大限に発揮し、社会に貢献する人に成長できる後押しとなることが期待されます。多様な背景を持つ子どもたちが、社会にしっかりと根を張って活躍できるよう、周りの支援する姿勢が重要です。

インタビュー・執筆 吉田 加奈子（東京都人権啓発センター 専門員）

※1 日本国籍を持つ人と同一の教育を受ける機会を確保し、外国人児童生徒等の就学促進の取り組みを行っています。詳細は、文部科学省HPの就学事務Q&A13をご参照ください。
※2 文部科学省2024年8月8日発表「令和5年度外国人の子供の就学状況等調査」による。
※3 所在地：福生市志茂183-2-B1 ホームページ https://www.kodomo-nihongo.com
※4 文部科学省2024年8月8日発表「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（令和5年度）」による。

EVENT 人権啓発行事のご案内とお知らせ

人権問題都民講座
「ジェンダーと多様性の視点から取り組む被災者支援」

災害に伴う人権問題

女性の参画を含め、年齢やジェンダー等に制限されることなく人々が多様な視点に立って支援に取り組むことが、一人ひとりの人権が尊重される防災行動や被災者支援につながります。このことを理解し、また、誰もが必要な支援を受けられる社会を築いていくことについて考える機会とします。

イベント

日　　時　2025年１月25日（土）15:00～17:00
講　　師　浅野 幸子（減災と男女共同参画研修推進センター 共同代表）
申込締切　会場：2025年１月17日（金）正午
　　オンライン：2025年１月23日（木）
開催方法　会場及びオンライン（Zoom）開催
定　　員　会場60名、リモート参加は申込者全員
　　（無料・要事前申し込み・会場参加は抽選）
会　　場　東京都人権プラザ　１階 セミナールーム
※情報保障・託児についてはお問合せください。

人権啓発行事
映画「かづゑ的」上映とトーク

ハンセン病

ハンセン病をテーマにした作品を通し、全ての人の人権が尊重され、自分らしく生きられる社会を形成していくために、一人ひとりができることを考える機会とします。上映後、熊谷 博子監督によるトークも。

イベント

日　　時　2025年１月28日（火）13:30～16:40
申込締切　2025年１月17日（金）
定　　員　300名（無料・要事前申し込み・先着順）
会　　場　東京ウィメンズプラザ　ホール
　　（渋谷区神宮前5-53-67）
※情報保障・託児についてはお問合せください。

人権啓発行事
沢（さわ） 知恵（ともえ）コンサート
「ありのままの私を愛して」

様々な人権課題

ライブハウスやホールのみならず、ハンセン病療養所、災害被災地、少年院などでも歌い続けてきた沢 知恵さんによる人権を考えるためのコンサートを行います。

イベント

日　　時　2025年２月21日（金）19：00～21：00
申込締切　2025年１月24日（金）17：30
出 演 者　沢 知恵（歌手）　ピアノ・うた
　　ゲスト キヨサク（MONGOL800）　ウクレレ・うた
　　立花 明彦（日本点字図書館館長）　おはなし
定　　員　350名（無料・要事前申し込み・抽選）
会　　場　サントリーホール「ブルーローズ」
※託児保育についてはお問合せください。

東京都人権プラザ（指定管理者：（公財）東京都人権啓発センター）　港区芝2-5-6　芝256スクエアビル　TEL 03-6722-0123

（公財）東京都人権啓発センター賛助会員募集のご案内

皆様とパートナーシップを築き、人権意識の高揚、人権問題の解決に向けて、ともに手を携えてまいりたいとの趣旨から「賛助会員制度」を設けております。趣旨にご賛同いただき、是非ご加入下さい。

個人賛助会員　一口　**2,000**円
団体賛助会員　一口　**30,000**円

問い合わせ　TEL **03-6722-0083**
（（公財）東京都人権啓発センター 企画広報課まで）

団体会員の皆様

（公財）東京都農林水産振興財団	東京都下水道サービス（株）	（一社）東京環境保全協会	東京都職員信用組合	東京都住宅供給公社	（順不同）
（公財）東京都中小企業振興公社	（公財）東京都歴史文化財団	東京臨海高速鉄道（株）	東京都商工会連合会	自治労東京都本部	
（株）首都圏環境美化センター	（一財）東京都営交通協力会	（株）東京エイドセンター	（株）東京ビッグサイト	東京食肉市場（株）	
（一財）東京都人材支援事業団	（一社）東京都信用組合協会	（公財）東京しごと財団	（公財）東京観光財団	東京港埠頭（株）	
東京都中小企業団体中央会	（一社）医療大麻dotオルグ	東京交通サービス（株）	（公財）東京税務協会	（株）ゆりかもめ	
（公財）東京都障害者スポーツ協会	（公財）東京都福祉保健財団	東京人権啓発企業連絡会	東京都公立大学法人	東京都競馬（株）	
（公財）東京都つながり創生財団	（公財）東京都学校給食会	多摩都市モノレール（株）	（一財）東京都弘済会	（株）東京交通会館	

編集後記　「見えないものを見ようとする視点」を大切にしてきたが、そもそも「誰に見えないのか」が曖昧だと気づいた。私の問題はあなたには見えず、あなたの問題は別の誰かには見えない。そうした無関心の連鎖を当たり前にしたくない。「私はあなたに関心がある」というメッセージを伝え、今まで自分に見えていなかったものを見ようとする努力を、これからも続けていきたい。（吉田）

Vol.104 2024年冬号　2024年12月31日発行（年4回発行）

マルチメディアDAISY版を作成しています。ご希望の方は（公財）東京都人権啓発センターまでお問い合わせください。「DAISY（デイジー）」とは、視覚障害などさまざまな理由で活字を読むことが困難な方のための、デジタル図書です。

この冊子は再生紙を使用しています。本誌の無断転載はお断りします。本誌を研修等でご利用の際は出典をご明記ください。

誰もが幸せを実感できる社会へ
TOKYO人権

制作　株式会社ブックマーク
発行　公益財団法人東京都人権啓発センター
〒105-0014 港区芝2-5-6 芝256スクエアビル2階
TEL 03-6722-0085 FAX 03-6722-0084
https://www.tokyo-jinken.or.jp/